

Summary, 30 January, 2020

日時：2020年1月30日（木）5限(16:00-17:30)

会場：東京外国語大学 研究講義棟 227 大講義室

日本語時間名詞の構造について

講師：田窪行則（国立国語研究所所長、日本言語学会会長）

TAKUBO Yukinori

この講演では現代日本語の時間に関する表現について考察し、そこに現れている構造を見て、日本人にとって、ひいては人間にとって「時間」はどのようにとらえられているのかを考えた。「時間そのもの」がどのようなものかはここでは問題にせず、我々が「時間」を言語でどのように表しているのかを観察し、その観察を通して我々の時間のとらえ方を考えることにする。

まず、時間と「いま」「日曜日」「明日」「2000年11月2日」などの時間に対して与えられる「名前」とは区別されなければならない。我々は時間に対してさまざまな名前を与えるが、そのあるものは我々の時間知覚や天体の動きの理解に基づいているが、あるものは便宜的な尺度により、制度として与えられたものであり、それらは互いに言語的に別の振る舞いをする可能性がある。

この講演では、日本語におけるさまざまな時間名詞を見て、それらの分類をすることで時間名詞類の性質を概観する。しかる後に「いま、今日、明日、今年、来週」と言ったダイクティックな時間名詞（発話時がその定義に用いられる時間名詞）の性質を見る。ダイクティックな時間名詞は「今日、明日」、「今年、来年」などのように同じ構造をしたものが繰り返し起こる周期的な性質を持つものと「いま、さっき」などのように周期構造がないものに分類できる。

最後に「いまごろ」という表現を取り上げ、それが周期構造に依存しながら定義され、「いま」すなわち発話時の、周期構造における対応物を表すという特徴に着目しながら、その使用制限をみた。